統一思考における絶対的価値

トーマス・セローバー
清心神学大学院教授
米国/韓国

序論

おそらく文鮮明師によって開始された最もよく知られていて野心的な学術プロジェクトは、科学の統一に関する国際会議（ICUS）[1] であろう。ICUS 会議の「形成、組織、拡大の背景と出発点」について、文師は、「世界の専門家と共に絶対的価値を追求するために」創設したと説明した。[2] 文師によって創設され指導されたこの学術的で知的なイニシアチブは、主題が神学的か、哲学的か、歴史的であるか、または科学的であるかに関わらず、絶対的価値が統一思考における重要なテーマであるという証拠を提供する。この論文は、絶対的価値を優先させることが統一思考の特徴であることを示唆する。

この論文で探求するように、絶対的価値に関する統一思考は、二つの面：創造と復帰から説明される。これは統一原理で教えられているように、人間と神の関係の二面性を反映するものである。絶対的価値の探求と焦点はこれらの二つの様相で異なって現れる。自然科学と社会科学における思考に相応しているからである。[3]

後にわかるように、ICUS 会議の科学者への文師のアピールは絶対的価値の存在の現実的可能性が科学や哲学を調査することで発見可能であることを認識してほしということであった。このアプローチを私は「創造的」または「創造に基づく」と呼んでいる。何故なら、それは創造における価値の本来の存在論に焦点を合わせているからである。他方、絶対的価値への復帰的アプローチは、私たちの実存的な経験の世界における価値を評価において、誤って評価する問題（神学的に、偶像崇拝の問題）を含む気まぐれな面を是正しようとする。両者を合わせて、絶対的価値に対する創造的及び復帰的アプローチは人間の絶対的価値の認識に達する。しかしながら、まず最初に、神における絶対的価値の根拠を認識することが統一思考に不可欠である。

1. 絶対的価値の可能性と根拠

統一思考における絶対的価値の意義を理解するためには、先ず、すべての存在の神的源泉とのそれらの関係を明白にしなければならない。この点は統一思想において以下のように力強く表現されている。

> 絶対的価値は神の絶対愛に基づく真、善、美、すなわち、絶対真、絶対善、および絶対美の価値である。したがって、この新しい価値観は絶対愛に基づいて確立される。[4]

この文節は、絶対価値が絶対愛、すなわち、神の絶対愛から来ることを明確にする。これは確かに絶対的価値に関する文鮮明師の教えのためには適切な定義である。正に、存在の源泉が彼の思想にとって基本的なものであると同様に、価値の源泉として神に根拠をおくものである。絶対的価値を追求する経路を辿れば、神、生きた神に至るであろう。それはまた、絶対的価値を擁護した伝統、すなわちソクラテス派、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教の伝統の参加者たちとの交わりへ導くであろう。[5]

しかしながら、一たびこのように神に根拠をおくことが——絶対的に（すなわち、妥協なく）——認められると、その根拠は常に言及する必要はなくなる。常に神に言及することが、その考えが神中心であることを必ずしも保証するものではない。価値に関する我々の思考の基礎となっている統一された存在論的かつ価値論的根拠があるという確信があれば、その神学的土台に絶えず言及することは必要でないかもしれない。すると、非有神論の文脈においてさえ、自然の宇宙的秩序自体に基づいているものとして、絶対的価値を肯定するのは、依然として可能であるかもしれない。文師がすべての科学者と良心的な思想家を絶対的価値の探求に招待しているアリーナはこうしたものである。

幸い、絶対的価値の認識は一様性を必要としない。絶対的価値に関する統一思考は価値評価における個々人の見解の相違や独創性を認めている。統一思想要綱で次のように説明されている。

> このように、絶対的価値は絶対的基準によって決定されるとしても、当然、主観作用による個人差は存在するであろう。言い換えれば、絶対的価値は個人差を含んでいる普遍的な価値である。それはあたかも、個性真理体の中にも普遍相には個別相が含まれていることがわかるのと同様である。人間はそれぞれの個別相を通して、全体目的を追求する。かくして、普遍相を維持しながら、各自の個別相を表現するのである。[6]

絶対的価値の概念には個人差の許容が不可欠である。絶対的価値の探求は、自分自身のやり方を独断的に主張する「絶対主義」を要求したり、意味するものではないことを強調することが重要である。文師はこの点を ICUS に参加した科学者たちに明確に指摘して、次のように言われた。

> 私は、「絶対的価値」は今日の学者たちの間で人気のあるテーマではないことを知っています。しかし、まず、学者が絶対的価値と絶対主義を混乱させる誤りをしないように願います。私は何度かICUSで絶対価値は神の愛に基づくものであることを強調しました。神の愛は宗派的なものではありません。[7]

ある特定の公式や言い方に関する根本主義者の主張は、絶対的価値の「絶対性」が意味するものではない。むしろ、この場合に「絶対」とは、「比較にならないほど」、または測られないほど価

値がある、ということを意味するのである。この意味を覚えておくことで、絶対的価値について語るとき、我々は絶対主義の疑いを避けることができるし、絶対的価値に関して考えるとき、教条主義の疑いを避けることができる。

2. 創造における絶対的価値: 諸科学

ICUS 会議における一連の演説の中で、科学者たちの考えを神に関する思案へ導くために、文師は絶対的価値の概念を発展させた。これらの会議のために主催者の文師側は巨額の投資をしたことを意味したが、文師は参加している学者たちには関心のあるテーマを追求する完全な学問の自由があることを約束して次のように述べた。

> 尊敬する参加者の皆様。私はこの会議が今日の社会が直面している本質的な諸問題の解決に向けて真剣な討議を行うためのフォーラムとして役立ち、人々が求める理想世界の構築に大いに貢献することを切に希望します。すべての皆様が自由に自己の信じることを表明されることを願っています。そのような雰囲気から実りが得られるものと信じます。[8]

参加者たちこの招待に暖かく応じた。プリンストン大学の哲学者、ウォルター・カウフマンは1979 年ロサンゼルスで開催された第8回 ICUS で、「私がここにいるのは、かくも多くの素晴らしい参加者たちがおられ、議論のレベルが例外的に高く、これらの会議が見事に国際的かつ学際的であるからです。」[9]と述べた。この会議の国際的かつ学際的性質は計画的なものであった。それは絶対的価値の共通の探求を促進するような仕方で国籍や専門分野の境界を超越するためであったからである。

ICUS 会議では、現代の科学的研究の広範囲にわたるテーマのプレゼンテーションが含まれていたが、各会議の核心にはいつも絶対的価値の概念に関する文師の基調講演があった。文師は以下のように述べた。

> 私は、各学問分野にはそれ自身の特定の特徴があることを認識しています。そして、研究の専門化の必要性を理解しています。しかしながら、様々な個々の分野で行われた研究は、究極的には、共通の善のためにより十分に役立つように、互いに協力的で補足的な関係を通してまとめる必要があります。これが私が毎回のICUS会議のテーマに「絶対的価値」という言葉を継続して入れてきた理由です。[10]

ICUS の遺産は文師がなした公的なスピーチの中で見られるだけではなく、ICUS 自身の形態の中にも見られる。すなわち、国際的で学際的な集まりであり、現代科学が専門分野に分割されるようになったものを超越する議論に科学者を関与させ、「統一された」探求に結集させようとするものであった。

アルビン・ワインバーグ博士はテネシー州オークリッジにあるエネルギー分析研究所の著名な研究者で、1988 年の ICUS 会議議長を務めた人であるが、その会議の閉幕に際して、次のように宣言した。

> 私は初めて 90 以上の論文を見たとき、自分が威圧されたことを告白します。それらの論文は、特に、我々の継続的なテーマである統一と価値及び現代世界の再査定という会議テーマとは、ほとんど共通のテーマがないように思われました。しかし、この豊かで知的な饗宴で学ぶにつれ、私はテーマに完全に関連している共通の糸があることがわかってうれしくなりました。そして、論文発表者自身が見分けることができなかった糸がありました。それらの糸は異なる相互作用をしていない諸委員会の論文の比較からのみ出現することがしばしばあったのです。したがって、私は参加者の皆さんが勇敢にかつ雄弁に文師に対応されたことに対し、お祝いを申し上げなければなりません。[11]

ワインバーグはICUS 参加者の科学者や学者が実際には文師が提供した特定のテーマと挑戦に対応しようと試みたと報告している。ベンジャミン・ツェラーが ICUS 会議に関する説明の中で覚書しているように、「出席していた科学者たちは文師と統一運動の指示に応じて、科学の性質、現代世界におけるその位置、宗教とのその関係、科学はいかに統一されるか、諸価値との関係はどうあるべきか“について論じた。」[12]

様々な著者による絶対的価値における ICUS 論文は、“多様性、絶対的価値、共通性および対話”という本として出版された。[13] そのうえ、多くの学者たちが自分の論文が記載されている ICUS 研究論文集を適当な許可と信用と共に再刊した。このようにして、ICUS の努力の評価は広がった。文師の多くの ICUS スピーチが「平和経」として知られる最近出版された選集の中に取り入れられている。そのため、それらは統一主義者やその他の読者の注意を引くために、幅広く利用可能である。[14]

文師は、ICUS 会議に参加した科学者たちが、絶対的価値のメッセージを広げる代表的な前衛になることを期待された。

> これらの点を最初に認識するようになる人々は、真摯に気を配り、それぞれの研究分野で首尾一貫した責任ある指導をしなければなりません。学者たちは、今日の混乱した価値観の状況や自然、本来の尊厳、および人間の目的に関する誤った見解に対して、無関心であるべきではなく、熱心に対応すべきであると私は感じます。これは特定の研究分野に限られることではなく、すべての分野に等しく適用するものであり、使命感によって動機づけられた集合的で調整された努力を通して達成することができるのです。[15]

このように、彼は、そのような大義を引き受けるように科学者たちに勧告した。ツェラーの言葉で言えば、「統一主義者たちにとって、宗教との究極の世紀の一体化に向かって科学を導き、世話することは、そのような自己理解の運動の核心的な部分を代表するものであった。[16]

宗教と科学の分離と対立は近現代の世界観のお決まりの問題であってきた。統一原理の序論では宗教と科学の関係と将来の統一に関する異なるビジョンを述べているが、そのような和解は実際にどのように達成できるであろうか? その答えは単に統一原理の教え自体が宗教と科学の問題を解決すると主張することではない。このような主張だけでは科学と宗教を統一するための架け橋としては狭すぎる。誤解されれば、それは他に勧告することがほとんどない一つのイデオロギーの主張になるだけであろう。正に、科学と宗教の統一に関する文師の教えにとって、現在の統一運動がこの問題を解決するという主張に単純に矮小化するにはあまりにも安易かつありそうなことであろう。それは文師の考えと遺産の深刻な過小評価となるであろう。

ICUS 会議の現象は、神を「ナンバーワンの科学者」であるとの認識を西洋の科学思想の主要な血流に注入する文師の並外れた企てを代表するものである。文師は絶対的価値の重要性に対するその堅くて強い信念を表現しただけではなく、世界の最も著名な科学者たちが、自分が言っていること、すなわち、神が絶対的価値の源であるということの意義を理解し、ありがたく思うであろうと信じていたように見える。

文師が ICUS 会議を通して推進しようとしていたことは、創造に関する科学的な探求を通して、神にいたるもう一つの方法であった。すなわち、文師が神について話すとき、彼は単に宗教に関して話しているだけではなかった。彼は絶対的価値について考えたり、話すことによって、科学と宗教の知的指導者たちが神について一緒に話しをするようにさせようと様々な仕方で試みていたのである。科学者たちに絶対的価値について話しをさせることが、創造の源について考えるように彼らを導くことになることを文師は、望んでいたのである。

3. 復帰における絶対的価値: 社会と哲学

明快さ、真実性、および正直さの知的価値及び有用性と恩恵の実用的価値の両方に関して、絶対的価値が科学的探究の根底にあるように、絶対的価値はまた社会及び経済の活動の形成においても不可欠である。これらの価値は復帰的なものとして分類またはアプローチできるものである。何故なら、それらに関する我々の理解は復帰歴史の必然性と過程によって知らされたからである。[17]

社会分野では、人権がそのような絶対的価値の一例である。堕落世界の政治的な専制の状況の下では、基本的人権の擁護は抑圧的な主権の諸悪に対する審判を代表する。人権が何か他の目標に向かう道具になるものとして、例えば、生産性にとって有益であるなどとして構想されるとすれば、それは人権の概念を害することになるだろう。人権は交渉できない価値でなければならない。その意味で人権は絶対的価値であり、超越的な源泉を持つに違いない。例えば、アメリカの独立宣言には、人権は「創造主によって授けられた」、と書かれている。

正義、公正、包含性、自由などの価値は、すべて本然の人間の価値を復帰する歴史過程によって補強されている。第10回 ICUS における演説において、文師は、社会経済生活における分裂

を克服するための絶対的価値の意義に焦点を合わせて、以下のように述べた。

> 上流階級と下層階級の人々の間の一体化をもたらすために、私たちは、上流階級の人々に対して、下層階級の人々と一つとなり、後者を前者のレベルに引き上げるように奨励しなければなりません。それを達成するためには、絶対価値の中心点が必要であります。[18]

彼は続けて、絶対的価値の中心点とは神の愛であり、神の愛は、階級その他の分裂によって縛られるものではなく、それらの分裂を克服する鍵である、と説明した。

> 神の愛は上流階級と下層階級の両方の人々と共に住むことができます。神の愛は決して一つの方向だけを向いているのではありません。それは球形に動く力であり、最も高い点から最も低い点まで自由に回転できるものです。…神の愛はいつ、どこにあっても、常に絶対的価値を所有しています。[19]

神の愛は絶対的価値であるので、階級を分離する近くのものを相対化し、どんな位置からも近づくことができる。それと同時に、絶対的価値としての神の愛に対する忠誠は、経済的正義、経済界の再人間化の追求に力となるのに欠如している成分を与えることができる。

文師は復帰の過程において、絶対的価値の擁護に関して宗教の鍵となる役割を指摘する。宗教および社会発展に対するその影響の認識は、社会学者のマックス・ウェーバーによって、世界的諸宗教の「経済倫理」に関するその記念碑的一連の著作の中で記述されたことは良く知られている。[20]

ウェーバーは絶対的価値に関する論理的思考の過程である価値合理性または「価値論的合理性」(*Wertrationalität*)の概念を開発した。[21] ウェーバーは価値合理性への呼びかけを世界中の予言的な宗教運動を動機づける核心と見て、この呼びかけが社会発展に関する本当の世界的結果であると指摘した。正に、絶対的価値から流れ出る合理性は、文師の努力の多くの面の鍵と考えることができる。[22]しかし、文師はウェーバーの記述的調査を越えて、諸宗教の間で絶対的に保持されているすべての諸価値の統合を宣言したのである。

今日の社会において、絶対的価値を指向する考え方に対する挑戦の一つは、ポストモダニズムとして知られる哲学的な傾向の増加する影響である。ポストモダニズムは絶対的価値の存在を否定し、それを擁護する人々に問いかける。

「ポストモダニズムの心を超えて」(“Beyond Postmodern Mind”)の中で、ヒューストン・スミスは統一運動が主催した多くの会議に参加した有名かつ尊敬された世界宗教学者であるが、彼は、ポストモダニズムの考え方が自らに課している限界について説得力ある批判をした。彼は、それを「現実が個人的なものであるという確信を失ってしまったために、人間の理性が明らかにするこ

とができるほど秩序あるものか否かを問うようになった考え方である」と定義した。[23]

文師は、西洋文明が重病であるとするポストモダニストの何人かには同意するだろうが、さらに進んで、しばしばポストモダニズムのムードを特徴付ける「ポストモルテミズム（“post-mortemism”」）には耽溺しない。彼は絶対的価値に関する新しいコンセンサスを、特に科学者の間で構築するために予言的に働いてきた。絶対的価値に照らして科学の研究を考え、追求するように科学者たちを説得できると彼は信じていた。ポストモダニストたちは絶対的価値に関する会話から自由に手を引くかもしれない。それは自由自体がそうした価値の一つであるからである。しかし、彼らにはその会話を妨害するいかなる知的または政治的権利もない。

それは文師またはヒューストン・スミスが絶対的価値を擁護することによって知的討論を無視したいか、またはやめさせたがっているということでない。「絶対的価値は合理的な思考と矛盾するものではない。むしろ、究極の目的の発見を可能にする。」と、文師は強調する。[24]

文師が教えるように、人間の理性には目的があり、絶対的価値に照らしてのみ、この目的を発見し、成就することができるのである。理性にある種の自治と主権を与えても、依然としてそれは命令し、誘惑する目的を有する。人間の理性が何故発展したか、その理由は神の真の愛を理解するためである。そのようにしてのみ、思考は実際には本当に私たちが望んでいる方向に導くことができる。文師がまとめて言われたように、「理性的な探求は真の愛に基づく絶対的価値によって導かれる場合にのみ、人類の真の幸福に貢献するだろう。」[25]

文師の教えが絶対的価値を強調するのは、旧式で前近代的で到達できないことが確かなことに回帰するようにとの呼びかけであるように見えるかも知れないが、それは実際には異なる未来指向の方向を指しているのである。このように、統一思考を通して、包括的な目標、源泉および目的として理性的な機能を愛に連結し直すことができるのである。

しかし、絶対的価値の追求とそれとの結合を妨げる障壁がある。絶対的価値の復帰的な面は一層の分析が必要である。文師が自然科学者だけでなく、社会科学者や社会哲学者を含むICUS参加者に説明したように、なぜ我々の生きた経験が価値の混乱の一つであるかについては特定の理由がある。

> 根本的に、今日の社会の価値の諸体系における混乱は神と人間の間の本然の縦的秩序の破れに由来します。今日我々が持つ様々な組織や価値は明確な方向性を欠き、質的に不安定でお互いに矛盾しています。これはそれらが人間によって考案され、神に連結する縦的軸なしに、横的にのみ設立されているからであります。[26]

より単刀直入に言えば、文師は絶対的価値の喪失の理由を人間の堕落した状態に帰して、「堕落のために、私たちは神を失った。絶対的真理と絶対的価値を失った。内的に一貫性のある真理と内的に一貫性のある価値の両方を失ってしまった。」と言われるのである。[27]

この堕落した状態の結果は、人間の評価が無秩序になっている。それは、自己中心の意識のレンズを通した屈折によって断片化され、争われている分野である。文師は次のように説明する。

> では、価値観の違いの基礎は何でしょうか? それは先ずエゴイズムに起因します。ほとんど例外なく、各個人はエゴイズムの囚人であり、各国と各人種は利己的にそれ自身の利益を追求しています。[28]

その結果、価値観の相違があるだけでなく、エゴイズムによって引き起こされた紛争が始まることになる。根本的な理由は、価値自体の内容ではなく、それらが絶対的根源との連結を欠いているという事実である。相対主義の価値はいつも部分的であって、党派心が強い自己中心の自意識によって歪められる。時々、このエゴイズムは自己中心的に誤った評価や物や人間の過度の価値評価に至る。これは神学で他人や物を不適切に利己的に価値評価する「偶像崇拝」と呼ばれる問題である。

もしそうだとすれば、私たちが(自分自身も含めて)知っているような人間は、どの程度まで絶対的価値を適切に評価できるであろうか? もし我々がそれらを絶対的に評価しないとすれば、適切に評価していることにはならない。それでは、絶対的価値を絶対的に評価するとは何を意味するであろうか？少なくとも、それはより高い価値のために喜んで自分を犠牲にするように、自分自身よりも高い価値を認めることを意味しなければならない。文師によると、「神と共に一つになることに絶対的価値があることがわからなければ、自己中心の問題を解決することはできない」。[29] エゴイズムを克服する鍵は神と絶対的価値を認めることである。

しかし、堕落性と堕落した環境に条件づけられている我々の実存的な自己にとって、絶対的価値を認識し、擁護することは可能であるか? 我々に言わせれば、その答えはたぶん「いいえ」であるだろう。しかしながら、文師の教えは、神が人間を復帰するために活発に働いて来られたことを明らかにする。統一思想要綱の説明によると、

> 神はアダムとイブの堕落後、ただちに復帰の摂理を始められた。その時　以来、神はみ旨が最終的に成就する将来に喜びの世界が実現するのを見たいという希望を抱いて、摂理を進めて来られた。[30]

統一原理で説明されているように、復帰摂理の鍵は犠牲的な愛である。絶対的価値は現実的であるが、我々がそれらを認識し、体験することができるのは、犠牲的な愛を通してのみである。皮肉なことだが、正にある人が人間であることの本当の価値を感じ体験できるのは、絶対的価値のために自分を進んで犠牲にする時のみである。

4.人間であることの絶対的価値

創造と復帰の両面が絶対的価値の追求の中で合わさってくる。欲望と価値の弁証法は統一思想の本の価値論の章の中で、李相憲先生とその協働者たちによって詳しく説明されている。[31] 価値追求欲は、価値論の核心的主題として容易に認められるものであるが、これは価値実現欲とペアになって、人を価値ある他人の方へ向けさせ、究極的には人間の源泉、創造主、天の親なる存在に向けさせる。このように、絶対的価値の探求には、価値実現欲を強化するという相互関係的効果がある。

絶対的価値についての議論のポイントは、そうした絶対価値に向けて我々の思考と行動を指向し直すことである。ひとたび絶対価値を認めると、我々と世界の間には大きな肯定がなされる。我々の周りの世界は価値があり、美と真理と善の世界であることを悟る。それで、それらの価値を認識する時点で、我々はそれらの価値によって情的、知的に活発に刺激されるのである。[32]

価値や愛への刺激は人間が自己自身の価値を認識するのを可能にする。価値を評価したり、評価されることの相乗効果については、文師が次のように述べている。

> 第一に、自然は万物、すなわち、調和と統一の中に存在しようとするすべての個性真理体の総合体です。自然の絶対的な役割は、人間が絶対的な対象の位置にある万物に対する愛の主管を実行しつつ、主体としての絶対的価値を実現できるようにすることです。[33]

自然万物には人間に対する対象の位置があるので、主体の位置の価値を認識するのは当然である。科学者になる人たちは、被造物のある特定の分野に魅せられてその研究を投入する。真理を探求することによって、被造物のその領域を知的に愛することを通して、彼らは実際に絶対的価値を探求し、主体であることの絶対的価値を獲得している。その意味で、ICUS に集まった科学者たちは、非常に価値あるグループの人々であった。

それ故、科学者たちが存在するものの多様性とそれらの正確な科学的数学的な関係について探求するとき、彼らは絶対的に価値ある存在、すなわちすべての価値の源たる神の絶対的価値について悟る過程もある。それと同時に、科学者たちはまた存在者の心と心情の中にある多様性を理解できる人間の価値の理解を広げつつある。このような方向性をもって、科学的調査は神と人間の両方の不思議を探求し、高めるであろう。専門的な科学者だけではなく、我々すべても、人間であることの絶対的価値を理解し実現するこの道へ招待され、歓迎される。

また、人間の相互作用の分野は絶対的価値の実現の分野となる。人間どうしの密接な関係は、特に家族間においては、絶対的価値の実現におけるダイナミックな相乗作用の機会を提供する。相手は単なる対象であるだけでなく主体でもあるので、主体間と対象間の関係も経験する。主体としてのみでなく対象として、愛する人としてだけでなく、愛される人としても自分を理解するようになる。文師の言葉では、

この中に我々は人間を人間にする絶対価値の基準を発見します。花と蝶の間の相互依存的で円満な関係のように、人々はお互いにのために生き、真の愛をを共有するように創造されています。これは、我々が絶対価値の基準を真の愛の人生の中で確立し、主体と対象の関係が調和の中で花開くようにすることを意味するのです。[34]

関係を通して絶対的価値を実現する潜在的可能性は、より広いレベルの家庭、社会、国家、世界を通し平和の構築に導くように拡大する。

真の平和は真の愛に基づいてのみ確立できる。そして、人々が人間を結びつける神中心の絶対的価値を理解する時にのみ、真の愛の関係を経験できるのである。[35]

縦的軸をよく立てれば、絶対的価値を最も広いレベルの人類に横的に広げることができる。

絶対的価値のこれらの関係圏への参加を通して、個人は自分の個人的な絶対的価値を悟ることができるようになる。

各人は個性真理体として、主体と対象の相互作用を通して自己の絶対的価値を実体化し、調和と愛の人生を追求しようとする。[36]

上に述べたように、特に堕落性の状態と堕落した環境の下では、我々は自分の値をよく理解することは全く困難である。我々は自分には大きな価値があると考えているように見えるが、いかに多くの時間とエネルギーを自分について考えるのに使っているかを考えると、現実には、エゴイズムに基づいた想像上の自己の価値は神によって与えられ、投入された絶対的価値に直面して無意義なものになってしまう。我々は神の前で対象意識を通して自分の絶対的価値を最も完全に経験するのである。[37]

神によって鼓吹された欲とは、価値を実現し、絶対的価値を顕現し、それによって真理で美しく、善なるものと評価されることができる関係的存在となることである。人間にとって絶対的価値の実現とは絶対的存在たる神の対象となることである。文師が説明するように、

神自身とさえ交換することができない相関的な価値をもって創造された形ある存在は人間です。絶対的価値をもった形ある存在はまさに人類であることが非常に明確になります。神はそのような理想を心にもって、価値ある存在としての我々を創造されたのです。[38]

文師が「絶対的価値をもった形ある存在はほかならぬ人間である」と言うとき、これは人類一般に適用するだけでなく、人類の代表としての各人にも適用される。

文師自体がこの教えの最も模範的な人物であるように見えるであろう。一人の個人として、

彼は人生のあらゆる領域に入って、それを絶対的価値、すなわち完全な復帰を通して神の創造理想を成就するための軌道と連結する責任を引き受けた。彼にとって、絶対的価値は抽象的な概念ではない。むしろ、それらは現代史において天の目的を実現するために個人的に関与するようにとの召集なのである。あらゆる節目において、彼の圧倒的な動機は価値を実現すること、すなわち神が人類歴史において探し求めてこられたすべての価値を天の父母に返還することのできる者になることであった。その過程で、文師は妻のハン・ハクジャ（韓鶴子）博士とのパートナーシップを通して天地人真の父母として、創造と復帰の絶対的価値の完全な具現化を達成した。

教えと模範を通して、文師は絶対的価値を追求して実現する道を開いた。絶対的価値の追求は一層の探求は必要としない。誰もが人間であることの絶対的価値を実現するように招待されているのである。

結論: 将来の見通し

教えのすべての記録に示されているように、文師は神と神の愛の実在の生き生きとした強力な感覚から語られた。彼にとって、この現実は、彼が感じるあらゆる状況と瞬間に充分に存在し顕現したことであった。しかし、彼はしばしば神のための感覚から離れるように教育されていた疑い深い人々に対して語った。そこで彼は、彼らが自分たちの道を神に向かって考え直すように誘うために絶対的価値の概念を推進したのである。

科学者に対してうまく働くことができれば、他の人々にもうまく働くかもしれない。神に関する文師の説教に直接慣れ親しんでいる人にとってさえ、ICUS 参加者に対する文師のスピーチの中で示された道に沿って、絶対的価値に関して神について考えることは元気を得られるものであることを発見するかもしれない。そうすることで、神について考える際に鮮明さを新たにすること可能になる。

先に述べたように、文師は絶対的価値は神の愛に根ざしていると教える。かくして、絶対的価値の探求は神の愛の探求である。文師は神の愛の超越し包含する性質について次のように述べた。

> 神の愛は人間の心の中に深く浸透し、人間の日常生活の中にほとばしり出ている真の愛の源になります。それ故、神の愛は、すべての人々を抱き、すべての相対的価値を包含する一つの調和した心情圏を形成するための根本的な要素です。したがって、神の愛に基づく絶対的価値は、合理的な前提や、相対的なイデオロギーや信念に基づく価値よりもより深く、より広く、より恒常的なのです。[39]

このメッセージの中で、文師は絶対的価値についての我々の思考はいつも価値自体に不十分であることを継続して認識する必要性について、我々すべてに思い起こさせている。ちょうど神学者が、イスラム教徒と共に、「神はより偉大である」、神は神のいかなる概念よりも偉大である、と

常に言わなければならないのと同じように、絶対的価値は常にそれを説明する我々の能力を超越する。

価値を実現しようとする要求もまた絶対的で無限であり、現在の価値の実現を超えて人、家庭、社会、世界に対して呼びかける。その無限の呼びかけは、根本的に恩恵と愛に基づいていなければ、無限の負担として感じられるであろう。より高く、より深く人(家族、社会、および世界)が価値を実現するほど、無限の神の愛の体験がより充分に感じられる。価値を評価する行為自体は反射的である。人間が価値を評価し、追求するほど、より価値あるものとなり、我々の真の価値を顕現する。

神の愛の絶対的な価値に相対するのは、神の愛を受ける人間の絶対的価値である。文師が教えるように、「このように、人間は神の愛の理想の完成のために絶対に必要である。このことから私たちは絶対的パートナーが絶対的価値をつくることを理解できる。」[40] 価値評価の人間の過程には心情を構成する知情意が関与する。我々自身の人間評価においてこのような心情の関与が神の創造の根底にある心情の動機を反映するとき、絶対的価値が実現される。

絶対的価値は二つの面で実現される。絶対的価値の創造的な側面は自然界の調査を通して認識される。復帰の側面は、人間の実存的な状況を人間の幸福のための神の不滅の献身に照らして見るとき、焦点になる。文師の教えの中で明らかにされているように、神は人間が充分に心から絶対的価値を追求して実現することができる時点まで人間を復帰するために長い苦難の過程を主宰してこられた。犠牲的な愛は復帰の力としての神の愛の本質的な属性である。それ故、犠牲的な愛はまた、我々の絶対的な価値評価の基準でもあり、自分自身の生命の価値よりも上に置くのである。
かくして、このように考えることは人間であることの絶対的価値のより深い実現に導く。

絶対的価値のテーマの下で、文鮮明師は有神論的科学、すなわち、神的源泉を認める科学、無限に価値があり、すべての正しい価値評価の源である科学のために、情熱的で一貫した擁護をした。絶対的価値およびそれらの神的源泉に焦点を合わせることによって、科学者たちは、過去の技術の否定的な効果のいくつかをより効果的に克服するのを助けることができる。

> 私たちはどこに絶対的価値を見つけることができるか? 神の愛の中にのみ見つけることができる。神の愛に基づく、美、真、善はそれ自体が絶対的価値である。それ故、私たちは科学自体が神を認めて技術を神の愛と同じ方向に適用するときにのみ、科学技術の誤用によって引き起こされた弊害から人類を解放できると結論するのは妥当である。[41]

このように、科学は来たるべき「心情の文化」と絶対的価値の実現にさらに大きい貢献をするだろう。

神の愛は絶対的価値の唯一の源であるだけではない。神は究極のそして絶対的な価値の評価者である。存在の類推というよりむしろ、神の愛を評価の絶対的価値及び価値評価の究極の

源と考えることは、”価値と価値評価の偉大な鎖“を通して神へ導くことになる。時として、統一思考は先に進んで、明確に神に言及することなく、絶対的価値について語ることになるかもしれないが、これは口に出さない暗黙の神学である。神の臨在の現実は統一思考が掲げる絶対的価値を浸透させるのである。

注:

1. The International Conferences on the Unity of the Sciences (ICUS) took place nearly every year from 1972 until 1992, when they were folded into the World Culture and Sports Festival. The ICUS conferences brought together eminent scientists and other scholars, including numerous Nobel Prize winners, to discuss and explore the basis for the unity of science.
2. *Cheon Seong Gyeong* (2013), p. 1112.
3. See *Exposition of the Divine Principle.*
4. Unification Thought Institute, *New Essentials of Unification Thought: Head-Wing Thought*, p. 225.
5. See the article by Charles Malik, "The Search for Absolute Values" in *Diversity, Absolute Value, Commonality and Dialogue*, pp. 118-143.
6. *New Essentials*, p. 216.
7. Reverend Sun Myung Moon, "Founder's Address" at the 16th ICUS, "Absolute Values and a Reassessment of Contemporary Society." See *Pyeong Hwa Gyeong*, p. 778.
8. Reverend Sun Myung Moon, "Founder's Address" at the Seventh ICUS titled "The Re-Evaluation of Existing Values and the Search for Absolute Values," Boston, November 24-26, 1978.
9. Quoted in *New Scientist*, 25 June 1981.
10. "Absolute Values and a Reassessment of the Contemporary World," *Pyeong Hwa Gyeong*, p. 784.
11. Quoted in Tamara Grapek's report on the 17th ICUS, Los Angeles, November 24-27, 1988. See http://www.tparents.org/Moon-Talks/sunmyungmoon88/SunMyungMoon-881125.htm.
12. Benjamin Zeller, *Prophets and Protons: New Religious Movements and Science in Late Twentieth-Century America*, p. 62.
13. Published by Sun Moon University Publishing Center in 2005.
14. See *Pyeong Hwa Gyeong*, Book 5, "Absolute Values and a New World Order," especially pp. 697-799.
15. "Founder's Address" at the 7th ICUS.
16. Zeller, p. 163.
17. See *Exposition of Divine Principle*, Part II.
18. Reverend Sun Myung Moon, "Founder's Address" for the 10th ICUS, "The Search for Absolute Values and the Creation of the New World," Seoul, Korea, November 9-13, 1981.
19. "Founder's Address" for the 10th ICUS.
20. Comprising his books, *The Protestant Ethic and the Spirit of Capitalism*, *The Religion of India*, *The Religion of China*, and *Ancient Judaism*.

21. See the explanation of Weber's concept of "axiological rationality" in Raymond Boudon's *The Origin of Values: Sociology and Philosophy of Beliefs*, p. 86f.
22. See my article, "Exemplary Ethics: Sun Myung Moon and Hak Ja Han as Religious Founders" in *Dialogue & Alliance,* Vol.13 No.1 Spring 1999, p66ff.
23. Huston Smith, *Beyond the Postmodern Mind: The Place of Meaning in a Global Civilization,* p. 23.
24. "Founder's Address" at the 16th ICUS, "Absolute Values and the Reassessment of Contemporary Society," Atlanta, Georgia, November 27, 1987; *Pyeong Hwa Gyeong*, p. 778.
25. "Founder's Address" at the 16th ICUS; *Pyeong Hwa Gyeong*, p. 778.
26. Rev. Sun Myung Moon, "Absolute Values and a Reassessment of the Contemporary World," given as the "Founder's Address" at the 18th ICUS, in Seoul, Korea, August 24, 1991. See *Pyeong Hwa Gyeong*, p. 782.
27. *Cheon Seong Gyeong* (2013), p. 43.
28. Rev. Sun Myung Moon, "Absolute Value Perspective" at the 11th ICUS. *Pyeong Hwa Gyeong*, p. 738.
29. *Cheon Seong Gyeong* (2013), p. 450.
30. *New Essentials*, p. 251.
31. See especially "Divine Principle Foundation for Axiology," *New Essentials*, pp. 204-7.
32. Thus, the value intrinsic to "all things" is realized. Further discussion would develop along the lines of "potential value" and "actual value" (or "realized value"); see *New Essentials*, p. 208.
33. *Cheon Seong Gyeong* (2013), p. 595.
34. *Cheon Seong Gyeong* (2013), p. 1395.
35. *Cheon Seong Gyeong* (2013), p. 1029.
36. *Cheon Seong Gyeong* (2013), p. 595.
37. See *New Essentials*, p. 173.
38. Speeches of Reverend Sun Myung Moon, 68-134, 1973.7.29, see *Cheon Seong Gyeong (2006)*, p. 1659.
39. "Founder's Address" at the 16th ICUS, "Absolute Values and a Reassessment of Contemporary Society." See *Pyeong Hwa Gyeong*, p. 778.
40. *Cheon Seong Gyeong* (2013), 1380.
41. *Cheon Seong Gyeong* (2013), p. 626.

参考文献

Boudon, Raymond. *The Origin of Values: Sociology and Philosophy of Beliefs*. Piscataway, NJ: Transaction Publishers reprint, 2013.

FFWPU. *Cheon Seong Gyeong: The Holy Scripture of Cheon Il Guk*. Seoul: Seonghwa Publications, 2014.

_____. *Cheon Seong Gyeong: Selections from the Speeches of True Parents*. Seoul: Sunghwa Publishing Company, 2006.

_____. *Exposition of the Divine Principle*. Special Ed., Sung Hwa Publishing, 2013.

_____. *Pyeong Hwa Gyeong: The Holy Scripture of Cheon Il Guk*. Seoul: Seonghwa Publications, 2014.

Malik, Charles H. "The Search for Absolute Values" in *Diversity, Absolute Value, Commonality and Dialogue*, pp. 118-143.

Moon, Reverend Sun Myung. "Founder's Address" at the 7th ICUS, "The Re-Evaluation of Existing Values and the Search for Absolute Values," Boston, November 24-26, 1978.

_____. "Founder's Address" at the 10th ICUS, "The Search for Absolute Values and the Creation of the New World," Seoul, Korea, November 9-13, 1981.

Selover, Thomas. "Exemplary Ethics: Sun Myung Moon and Hak Ja Han as Religious Founders," *Dialogue & Alliance*. Vol.13 No.1 Spring 1999, p. 66ff.

Smith, Huston. *Beyond the Postmodern Mind: The Place of Meaning in a Global Civilization*. 3rd edition. Wheaton, IL: Quest Books, 2003.

Unification Thought Institute. *Diversity, Absolute Value, Commonality and Dialogue*. Research Series of ICUS Papers 5. Sun Moon University Publishing Center, 2005.

_____. *New Essentials of Unification Thought: Head-Wing Thought*. Tokyo: Kogensha, 2006.

Weinberg, Alvin, "Chairman's Remarks" summarizing the 17th ICUS, quoted in the report by Tamara Grapek. www.tparents.org/Moon-Talks/sunmyungmoon88/ SunMyungMoon-881125.htm (accessed July 15, 2015).

Zeller, Benjamin E. *Prophets and Protons: New Religious Movements and Science in Late Twentieth-Century America*. New York: NYU Press, 2010.